被災者と悲しみ共有

AMDA活動報告

救える命があればどこへでも

□2□

菅波　茂

「参加」の真の意味

「災害医療援助は参加である」。AMDAの基本姿勢だ。災害による被害が激しければ激しいほど、被災者は悲しみに暮れ絶望に陥っている。「参加」の真の意味は「被災者と悲しみを共有し、被災者の夢を育む」ことである。人間が絶望に陥るのは、存在を無視されたと思う時である。

被災地に直接参加することが「あなたの存在を認めていますよ。あなたを見捨てていませんよ」という明快なメッセージにつながる。このメッセージにより、絶望から夢や希望を見いだして生き抜こうとする強靭な生命力が生まれてくる。だから「参加」なのである。

AMDA多国籍医師団インドネシアチームは被災地バンダアチェに津波発生翌日には到着して、昨年十二月二十八日より診療を開始した。バンダアチェにある六つの医療機関のうち四つが津波により崩壊、残りのうち一つは半数以上の医師や看護師の死により稼働していなかった。

最後の一つはケスダム軍病院だった。院長がAMDAのチームを率いたパトルシー医師の弟子だったため、病院内部にも二百体以上の遺体が収容され、混乱の最中だったにもかかわらず居室と簡素な食事が提供され、チームは医療活動を開始することができた。

同病院で依頼された緊急手術を行うとともに、ケタパン地区に仮設診療所を設置、さらには医療アクセスが困難な地域での巡回診療などで被災者への診療を行っている。急性上気道炎や熱、下痢の患者が絶えないことを考慮して診療は当分継続していくが、沖縄県内各方面から送られた医薬品が大いに役立つだろう。

過酷な現実から新たな夢

被災地バンダアチェで巡回診療をするAMDA沖縄支部の大城七子看護師（右）＝AMDA提供

AMDA多国籍医師団インドネシアチームには岡山本部、沖縄支部、カナダ、カンボジア、台湾、ネパール各支部も参加したが、圧巻はAMDAインドネシア支部長タンラ医師が属するハサヌディン大学から派遣されてくる大量の医師や医学生のボランティアチームの活動だった。「人道援助精神は先進国の専売特許にあらず」ということである。「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」という証明でもあった。

タンラ医師からは、バンダアチェの復興計画についての二つの提案が届いた。一つ目は崩壊を免れた病院の看護師さんを訓練する臨床教育プログラムである。二つ目は災害研究所の設立である。災害後遺症の方々の長期的なケアを含めて、地域防災教育、災害救助等々のプログラムを推進したいという現地の要望があるためである。スマトラ島を含めて過去に地震や洪水などの災害に悩まされてきたインドネシアの歴史に沿うコンセプトと言えよう。

この二つの提案は被災地の医療従事者の夢を育むものである。夢とは現実の反対、つまり過酷な現実であればあるほど、現実を投影した夢が育まれる。難民キャンプの子どもたちは医師や教師になりたいと言う。医療や教育の恩恵を受けられない厳しい現実が背景にある。復興支援とは夢の実現でもある。

AMDAは被災者の方々の夢の実現のために、インドネシアをはじめインド、スリランカでも復興支援活動に参加していく。

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。